

渡辺弘子先生のこと

中村 龍介

私が初めて渡辺先生の指導を受けたのは、雪谷大塚にある『東急カルチャースクール』の文章教室、二〇〇五年一月のことだったと記憶する。それまでの教室は奈良裕明氏という小説家の先生だった。

奈良先生が物語の展開を中心にマクロの話で指導するのに対して、エッセイストの渡辺先生はミクロの観点から文章の一つ一つの表現や書き方にこだわる。エッセイ志向の私にはとても有益な指南であった。

渡辺先生は、初対面の印象からは温和で上品な方だろうとお見受けしたが、これは半分当たりで半分外れであることが時間の経過とともに分かってきた。柔らかな外見に似合わず、意外にヤンチャでヒョウキンなところが垣間見られるようになる。時として発せられるブラックユーモアも核心をついていて面白い。

「イヤな女の子だったのよ」

不遇で貧しかった少女時代を振り返って、先生自身が総括される場面にも時として出会った。

先生は、物書きとしての立場以外にカウンセラーの仕事もされていて、ラジオ人生相談でも御活躍と聞く。それだけに、とても聴き上手だ。教室の最古参、M女史の毒舌にも上手に相槌を打ちながら話を進めて行く様は見事という他はない。

先生を語る上で忘れてはならないのは、御主人の存在だ。

渡辺利夫氏。産経新聞の「正論大賞」にも輝いた、日本ではトップクラスの保守論客の一人である。

経歴も凄い。慶應義塾大学経済学部卒業、同大学・大学院博士課程修了、経済学博士、筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長を経て現在、同大学学事顧問。

また、新聞、テレビをはじめとして、マスコミへの登場も多い。多くの著書もあつて私も愛読している。

これだけ立派な御主人なら、賢夫人として内助の功に徹するのでもまた選択肢かと思うのだが、渡辺先生としては御主人

よりも自分の立場を確保することに御執心で、利夫氏の秘書のような立場からの決別を宣言されたという。

渡辺先生は、別の物書き同人会で、最近『夫の家出』なるエッセイを書かれた。その中の一節を無断で紹介する。

：いま、残された時間を私自身の「書く」ために使いたいと夫に申し入れた。もし、このままであったら、私は「ご機嫌の悪い、いやな妻になってしまい、食事の支度も放棄する」てなことを、怒涛のごとく述べた。

「僕も気が付いていたよ」と夫。丁々発止となったとしても、考えを変えない覚悟でいたのに、早々と結論が出たのも拍子抜けだ。

御主人はとても理解のある方なのだ。だから妻の無謀とも思える申し出を受けて、快く御自分が身を引かれた。現在は、近くにマンションを借り、昼間はオフィス代わりに使われているという。

渡辺先生には書くべきことがたくさんある。断片的にはあるが、下書き程度はできている筈だ。御主人を追い出して、雪谷の四LDKマンションも昼間は先生のお城だ。

この九月、我々四人の生徒の指導も終わりを迎える。もうありあまるほどの時間を御自身の「書く」ために、しっかりと使っていたいただきましたよう。

一年後、いや二年後かな、先生が上梓されるはずの新作を生徒一同心待ちにしています。

【二〇一六年八月記 原稿用紙五枚 自由課題】

